
初恋

あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋

【Nコード】

N1572B

【作者名】

あくあ

【あらすじ】

恋をしたことなかった。だからこのもどかしい気持ちの正体が何かなんて分からなかったの…

わからないの。

あなたに対するこの想い…

こんな気持ち、生まれて初めて…

あなたを見ると、周りが見えなくなつて

目を細めてあなたに視点をあわせる私がいる。

頭がおかしくなつちやつたみたい…

「おっはよ〜」

元気の良い声が教室に響き渡る。

その声の持ち主は、顔を見なくつたつて分かるよ。

鈴木 滉大…

クラスのムードメーカーで、いつも周りには人が溢れてる。

私もあの中に入れたらな…なんて思つてる。

「あ。武田おはよ!!」

何人が集まつてる人の近くを通つたら、人だかりの中から顔をぴよ
こんと出して

彼が私にあいさつをしてくれた。

「お…はよ!!」

ビックリしてムダに大きな声になつた…

なんで声をかけられただけでこんなに慌てちゃうんだろ？

昼休み、私は仲良しの美々と佳奈子と話しをしていた。
話題はやっぱり、今流行？の恋バナ。

「佳奈子ー…田中とはどおなの？」

弁当を口にいれながら美々は佳奈子の恋愛事情を聞いた。

「何よ…どうもなつてないですー」

ジュースを飲もうとした佳奈子は一旦手を止めた。
ちよつと顔が赤くなつたのがわかる。

「そうかなあ…両思いに見えるのに…ね？伊麻^{いお}。」
恋バナつていつでも私はよく分からない…

「うーん…じゃないか…なあ？」

頼りなさげの返事に佳奈子は口を出した。

「伊麻は恋のことよく分かんないんだからそゆこと言わないの。」
苦笑いをして佳奈子を見つめる。変かな？

「純粹で可愛いなあ…伊麻。」

美々は私の方を向いて満面の笑みをくれた。

「ありがとう…。」

恋の話をしたとは思っただけど…

「カッコイイと思う人とかいないの？」

佳奈子の質問にちよつと困る。

「ほら。一緒にいたいな…とか。気になる程度の人くらいいるんじゃない?」

更に聞いてくる佳奈子は顔がマジだ。

「うーん…好きとか…どういう気持ちになることが分かんない。」
「ごめんね。と言ったが、今度は美々が食いついてきた。」

「クラスの男子だったら誰と話すのが好き??」

それは……

「鈴木…君?」

2人は顔を見合わせてじたばたした。

「それって恋じゃないの!?!」

「気が早いよ…だって鈴木君面白いし。話してて楽しいだけ。」

そんな驚かれると思ってなかったので、手を素早く振って誤解を解く。

「えええ…何かありそうなのに…」

あ…この変な気持ちのこと聞いてみようかな…

「でも…」

キンコーン……

「あー！鐘なつた！！やばい先生くる！！またあとで話して。バタバタと皆が自分の席に着いていく。」

「まあいつか。」

私もがたと席に着いた。

私の斜め前のもう一つ前が鈴木君だ。

また授業に集中せず、彼の方に目がいつてしまった。

キンコンカーンコン

「伊麻ーバイバイ 明日ね。」

「うんばいばい！」

今日は少し勉強してから帰ろうと思い、私は図書室へと向かった。

誰もいない図書室内はしんとしていた。

歴史の本の棚の近くに座り、鞆から勉強道具を取り出したが外がにぎやかで少し窓に歩み寄って外を眺めた。

「あ…野球部…」

そう呟くと、自然と野球部の鈴木君の姿を探していた。

……いたー！ついつい顔はゆるむ。

やっぱりもっと話したいな…近づきたいって思う…

6時をまわって、外も暗くなってきたので私は図書室を出て下駄箱へ向かった。

ガタガタ…

「ん？（誰か帰るトコなのかな？）」

そう思いそつと覗くと、彼がいた。私に気付くと声をかけてくれた。

「お？武田、今帰るとこなの？」

彼は泥で汚れたユニフォーム姿で、手にはズックの入った袋を持っていた。

「うん…あ。鈴木君は？まだ部活？」

「まあなーちよつと替えの靴取り入ってた。」

偶然に会えたのがなんだか嬉しくて、私は舞い上がったのかも知れない。

「鈴木君…少し時間ない…かなあ？」

もつと話したくて部活で忙しい鈴木君を呼び止めてしまった。

でも鈴木君はにこつと笑って、

「いいよ。10分位で戻れば何にも言われないし。」

と言ってくれた。

「ごめんね。ありがとう。」

私達は下駄箱の段差に座り、私は鈴木君に最近自分が変になっていることを話した。

「なんか…授業中でもその人のことふと見ちゃうんだ。」

「そっかぁー…」

鈴木君は足を伸ばした。

「もっと話したいと思ったり、声かけられただけでビクッとして…」

「うん。」

「大勢人がいるなか目で探したり……私変になったんだと思う……」
鈴木君は私の目を見た。

ドキドキドキ……

どうしてこんなに心臓が早く動くんだろう……
それに鈴木君に見られると、なんか恥ずかしい……

「誰に対してそうなるの？」

彼は不思議そうな目をしながら聞いてきた。

誰につて……

「鈴木君に……なんだけど……」

彼は一瞬でタコのように顔を真っ赤にさせた。

「あ。ごめん……変なこと言った？」

鈴木君は急に立ち上がり、一歩下がって言った。

「俺も……武田に対して、そうなるよ……!」

ばたばたとグラウンドへ走っていつてしまった。

「な……鈴木君も……？」

変なのは私だけじゃなかった……でも……私のこと見てくれてるって事？
なんだか身体が熱くなってくるのがわかった。

しばらくぼーつとしてると後ろから声が聞こえた。

「伊麻??こんなところで1人でなにしてんの!?!」
振り返るとそこには佳奈子がいた。

「佳奈子……テニス部終わったの?」

「うん 伊麻茶道部だから今日ないもんね……。」「
いいなーと私の横に佳奈子は座った。

「んで何してたの?」

「あのね、今日の昼休み話そうとしてたことなんだけど……」

「なにになに?」

「私、鈴木君のことをいつも目で追っちゃって……」

私は変な感情を全部佳奈子に話した。

すると彼女は目を丸くした後、満面の笑みでこういった。

「それが恋だよ……伊麻。」

心臓が、今までにないくらいバクバクと動いているのが分かった。

初めての……恋。

彼の言葉が頭をよぎった。

（後書き）

実る初恋もありますよね…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1572b/>

初恋

2010年10月28日03時01分発行